29M-am01

大学生のセルフメディケーション調査から考える薬剤師のあり方

○村瀬　義典[1], 本間　隆之[1], 奥村　順子[1], 木村　和子[1]（[1]金沢大院薬）

【背景・目的】近年，健康への関心の高まりや医療費の高騰により，わが国ではセルフメディケーション(以下 SM)を普及させようという動きが起こっている．本研究では，一人暮らしを始めることが多く SM を今後実施する機会が増えると思われる大学生に焦点をあて，SM 実施群と非実施群との比較により薬剤師による患者教育や SM への関与のあり方を考察した．

【方法】本学の学生にインタビューやアンケートを実施し質問紙を開発した．本学の講義担当者に依頼し，講義時間の一部を利用しアンケート調査を行った．調査項目は，属性，健康に関する意識，薬育を受けたか，風邪をひいた時の対処法，保管薬の有無，薬局の利用状況，OTC 購入時の重点，OTC 使用状況，薬に関する知識問題，一般的セルフエフィカシー(自己効力感)尺度とした．データの集計，解析には MS-Excel，SPSS11.5J for Windows を使用した．

【結果・考察】991 部配布し，うち 975 部を回収した(98.4%)．「最近風邪をひいたときに SM をした人」は 55.3%であった．SM 非実施群に比べ実施群では，「一人暮らし」・「保管薬有」・「ドラッグストアを頻繁に利用する」人が有意に多かった($P<0.05$，$P<0.001$，$P<0.001$)．この結果から薬剤師は OTC 販売時の服薬指導で，一度購入した薬を保管して次回の体調不良時に使用する可能性も考慮して服薬指導を実施する必要がある．また，日用品など医薬品購入以外を目的とした来店者にも情報を提供することや健康に関する相談に備えることで SM は適切な形で幅広く普及していくと考えられた．